

～ 11 月茶話会（21 回目）報告～

日 時：11月7日（日） 13：30～ ハピネス

予定議題：① 1年半のご苦労 ② 体調の変化、困りごと ③ 私達にできる社会貢献 ④ ケーススタディ 「薬が合わない」、「薬を飲むと（逆に）動けなくなる」

参加者 14（患者7、家族2、サポーター3、まちサポ1、生活支援1）途中退席1

ご意見 コロナで動けず足腰に来た。言葉が出にくい。呑み込みが悪い。むせる。40日ほどリハビリ入院。夕食後息苦しくなる。便秘がひどい。薬を飲むと固まる。靴下がはけない。1日に1回はこける。介護タクシーで病院に行ったら、発熱し（熱が体内にこもる傾向）帰路の乗車を断られた。幻覚が出る。便秘対策でバナナを食べる。薬を飲み忘れたとき症状が強くなる。視覚障害の場合は、同行援護制度があり、利用している。・・・生活支援コーディネーターさんのアドバイス

課 題 コロナで間隔を広く取り、声が聞こえづらかったので、今後はマイク使用。次回からは、冒頭に「日本の歌」を歌い、声を出やすくする。（コロナ次第）息抜きの簡単な体操・ストレッチも検討。ケーススタディの件は、この事例の検査見通しがつき、結果待ち。予定議題（私達にできる社会貢献）迄こなせなかった。送迎・会場催準備等のためボランティアを募集したい。



問合せ：ましきパ～キンソン等難病友の会
電 話：090-9070-6846

難病はだれもがなり得る病気です。

「仕事や趣味 諦めた」7割 パーキンソン病調査

パーキンソン病について、医療機器製造販売会社日本メドトロニックが患者・家族を対象に、インターネットでアンケートを実施したところ、発病で仕事や趣味を諦めざるを得なかったと回答した人は7割に達した。

調査は患者・家族計212人から回答を得た。この病気と診断された年齢を聞くと「70

代以上」34%、「60代」29%、「50代」23%、「40代以下」は14%だった。

現在行っている治療法を複数回答で尋ねると「薬物療法」98%、「運動療法」は43%。薬物療法では1日に服用している薬は平均3.4種類、服用回数は平均3.7回で、1日に6種類以上の薬を服用している人は15%、6回以上服用している人も15%いた。

薬物療法には60%の人が満足。不満足の人を理由を聞くと74%が「思ったほど症状がよくなる」と答えていた。

「発症後、仕事や趣味を諦めざるを得なかった経験はあるか」の問いには72%の人が「ある」と回答していた。

順天堂大順天堂医院の服部信孝教授（脳神経内科）は「社会との関わりや減少や治療法で悩んでいる人がまだ多くいる。治療選択肢をうまく見つけ、元気で長く暮らしていけるようにしたい」と話している。

(第3種郵便物認可)

熊 本

ムクナ豆の栽培園を見学する田主丸薬草研究会のメンバー

宇城市



宇城市で栽培・加工・販売 健康食品を商品化

健康食品として知られる「ムクナ豆」が宇城市で栽培されている。ドパミンの前駆物質であるL-ドーパを含み、人の活動を高める効果が見込まれる。栽培から販売まで地元の農家や加工・販売業者が担っており、希少な食材を扱う6次産業化のモデルとして注目を集めている。

「ムクナ豆」生産に熱視線



収穫時期の枯れたムクナ豆(上)と若い時期の豆

「これがムクナですか」。福岡県久留米市の田主丸薬草研究会のメンバー3人が10月20日、三角町の戸馳島にあるムクナ豆の栽培園を訪れた。熊本ムクナ豆研究会の阿曾田清会長(76)ら3人が出迎え、栽培方法を説明しながら収穫時期の枯れた豆と若い豆を並べて見せた。薬草研究会の富田義昭さん(74)は「今日の話を参考に、栽培に挑戦したい」と意欲的だった。

ムクナ豆の和名は「八升豆」で原産地はインド。熱帯気候で育ち、国内では熊本のほか和歌山県や鹿児島県、沖縄県などで栽培されているという。一見ソラマメのようで、粉はきな粉の風味がする。宇城市でムクナ豆の栽培が始まったのは2014年。阿曾田さんが、親交があった研究者から栽培を持ち掛けられたのがきっかけだった。当初は結実しなかったり、カビが発生したりと試行錯誤が続いたが、数年かかって、ようやく収穫にこぎつけた。

次の壁は販路だった。ムクナ豆研究会が相談を持ち掛けたのが、市の誘致企業の敷島印刷(松橋町)。敷島武社長(65)は地元支援の思いも込め、17年に健康食品販売の「敷島屋」を創業。商品開発に乗り出し、パウダーや錠剤、お茶、麺として販売。加工も市内の業者が手掛けており、パウダーはヨーグルトやプリンにかけたり飲み物に混ぜたりするのがお勤めだ。

ムクナ豆はインドの伝統医学であるアーユルヴェーダで使われてきた。パーキンソン病の治療薬にもL-ドーパは含まれており、この病気に有効であることが分かっている。ただL-ドーパを多量に摂取すると合併症のリスクを上げる可能性が予見されることから、国立病院機構熊本南病院(松橋町)脳神経内科部長の阪本徹郎医師(44)は「パーキンソン病の患者が摂取する際は、医師の指示に従ってほしい」とアドバイスしている。

(飛松佐和子)

クローズアップ